

連続

誌

上

シ

ン

ポ

ジ

ウ

ム

Part4

会員園一園一園が主体者となって「子どもの育ちを支える運動」に取り組んでくために！

私たちが認可保育園に望むこと

保育現場代表を招いての第1回誌上シンポジウム(8月号)に続いて、第2回目(10月号)と第3回目(11月号)は、我々保育現場と違う立場で子育て支援の第一線で活躍されている、地域子育て支援のアドバイザー、保護者の代表による誌上シンポジウムを掲載しました。

今回で最後となる第4回誌上シンポジウムは、保育士養成に携わっていらっしゃる二人をお招きしました。これまで掲載してきました誌上シンポジウムと同じく、子育てを取り巻く日本社会の現状から「子どもの育ちを支える」うえで、私たちが認可保育園に望むことをお話しいただきました。

まずは自己紹介

菊地／本日は保育研究者として、大変ご多忙な
籠^{かご}先生、岡先生をお招きしました。これまで、
両先生ともに全私保連とのかかわりがありなが
かったと思いますので、まずは自己紹介かたが
た、どのようなお立場で、どのような活動をさ
れているのかをお話しいただきたいと思いま
す。籠／私は、千葉市の外れにある小さな保育士養
成校(定員一五〇名)の学長をしています。大学
院を終えて、保育にはまったく関係のないこと
をやっていましたが、養成教育に入ってからこ
れ三十五年ぐらいになります。一九九〇年頃、保
育が少し動き出したときに学長を引き受けるこ

とになったのと、岡さんが勤務されている大妻
女子大学の学長だった故大場幸夫先生(二〇一
一年五月急逝)たちとお付き合いがあつて、保
育に関心を持つようになりました。それまでは
保育は大嫌いで、実習も嫌だったんですが…。

今年の四月からは大学付属の幼稚園の園長も
兼任しています。毎朝九時に園児を迎える仕事
をしながら、幼稚園をどういふふうに変えてい
こうかなあと見ているのですが(卒業生
も結構勤めています)、今日の保育士の質とか
養成に対して課題があると感じています。

また、今日のお話の課題になるのですが、
社会の変化に保育士養成とか子育てそのものが
とても追いつかない、基盤みたいなものがすこ
く崩壊してきているのかなあという感じがしま

〔出席者〕

籠 光夫
千葉明德短期大学学長

岡 健
大妻女子大学准教授

平野弘和
全私保連常務理事

千葉・岩根保育園園長

〔司会〕

菊地秀一

札幌・三和新琴似保育園園長

*順不同・敬称略

す。それに太刀打ちできるかといえ、我々養成教育もできないし、保育現場の先生方もあつぱあつぱしているのかなあという感じで見ています。フィールドは千葉県内で、全国にわたっては見ていませんが、今日はその中で自分の考えを述べたいと思います。

菊地／では岡先生、よろしくお願いいたします。岡／今、大妻女子大学の児童学科というところにおりますので、保育者、小学校の教員になる学生たちの養成が基本的な部分になります。

それ以外には、この十一月から九三年目に入りますが、大妻女子大学が多摩市と子育て支援施設の運営委託をしており、そのサポートという形で今、実際にかかわっています。

また、子どもの育ちの質というか、子どもの育ちを支えるということ、保育園の中で具体的に取り組むために、園内研修がどういふふうにつくられていけばいいのかということに関して、今一番、研究テーマとしては関心を持っています。

菊地／お二人とも、保育現場に携わっていたいているので、本質の部分でお聞きしたいことを伺えるのではないかと感じております。

早速、本題に入りますが、今、日本は子育てしにくい環境だといわれていますが、その背景にある日本社会について、子育てに特化して、どのようにお感じになっているか、お話ししたいかと思ひます。

学生たちの姿が まさに今の日本社会の象徴

籠／東京、千葉とも、すべてが集中しているが、人々の気持ちや関係がバラバラになっている、ぎりぎりのところまできていると思うんですね。

学生の姿を見ても同様で、カウンセリಂಗルームをつくると、すぐに利用者で満杯になる、そういう状況にあります。学生の中にも人間が疲弊しているという状況が出ています。四年制の大学ですと、もう精神科医を置かなきゃならないという状況までできています。

私たちの大学の話をしますと、一〇〇人中三〜四人は家族関係の中でもうあつぱあつぱして学校に出てこれない、DVだったり、離婚家族の中できちん関係を持てないまま育っている。たとえば、家族の問題とかいろいろものを授業の中で触れていくと、その子がものすごく精神的に不安定になるんです。

そういう子の親御さんに会ったりすると、子育てや家庭のことは女房に全部任せると、うちに帰ってドーンと座ってテレビ見て「おい、ビール持ってこい」なんていうのが当たり前、今の時代の中で古いお父さんをやっていたりして、娘と母親との関係の中でギクシャクしているんです。今もちょっと見ている学生は、短大

生なのに夜十時が門限で、遅れたら正座させられて説教されるか、ちよつと考えられない状態がたくさんあります。

もう本当に家族の中で支え合いながら育っていくという機能が失われていますね。核家族そのものが孤立しているのと、孤立した家族の中でまた孤立しているような状態ですね。

ですから、家族支援、保育相談という教科を受ける、支援してもらいたい、相談してもらいたい、母親を求めているという姿が、学生たちからぐーつと出てきます。それを二年間で逆転させるなんて至難の業です。我々はそんな教育能力は持っていませんから、大変です。

それと、グローバルなどいろんなことがいわれている一方で、そういうスピード感が今の日本の社会になくなっている、遅れているなどの指摘がありますよね。経済が停滞するとかいわれていますが、やはり子育てする時間、家庭での時間のあり方、生活のあり方みたいなものをどう守り、つくれるかということのほうが大切だと思ひます。

そういうことを全私保連の運動として広げてほしい。日々ゆつたりした時間と暮らしという生活を保育園を中心に、軸にしてつくれるかどうかということにかかっているんです。

菊地／学生たちの姿が、まさに今の日本社会を象徴していますね。岡先生はどのように感じていらつしやいますか？

子どもを後ろ向きから 眺めてみる

岡／倉橋惣三先生が、八十三年前ぐらいでしようか、「後ろ向き」という短言を書かれています。

熱心に鞆をついている子どもがいて、倉橋先生が「ああ、すてきななあ」と思っただけで、見惚れるんです。それで、どんな顔をして鞆をついているんだろうと思ひ、前に回ってその子の顔を見たいけれど、待て待て待て、前に回っちゃうと、その子が熱心に鞆をついている世界を壊してしまいかもしれないから、そのままじっと後ろから眺め続けよう。そうすることで子どもと同じ方向を向いているから、その子どもの気持ちかわかるかもしれないから…、というような文章を書かれていますよね。

私の中で感じるのは、そうやって子どもを後ろ向きから眺めるというようないふことができなくなってきたような気がしてしょうがないんです。逆をいへば、見えやすさ、わかりやすさということをもものすごく求めるという姿があるんだらうと思っただけです。

今、子どもが字を書けた、何かができたというようないふ、わかりやすさというところが、あたかも教育のすべてであるかのように語られ、そういうことを実践している、うちの園はこういうことをやっていますよというのがある種、親

御さんにとつては、すごく目玉になっていると思っただけです。

でもたとえば、子どもが、ありんこが巣穴から出入りするのをじっと見ている姿を先生方が見つけたとき、その姿が「いやあ、随分集中して眺めるようになったよな」「なんかいいよねえ」ってすごく嬉しくなるじゃないですか。

それで、この子はどんな顔してありんこを見ているんだらうと思っただけで、顔を見たいなうけど、見ちゃうとやめちゃうだらうと思っただけで、ぐっとこらえて後頭部からの写真を撮る。そしてそれをプリントして職員室で「ねえねえ、見て見て。○○ちゃん、さつきね、こうやって見てただけで、すごいよね、これ」という話をすると、先生方どうしの中では、「えー、○○ちゃんが？」って盛りあがるわけですよ。

でもたとえば、先生方が撮りためた日々の子どもの様子の写真を、保護者の方たちに「園の中の子どもの様子です。どうぞ、お好きな写真があったらご注文ください」と他の写真とともに出したとしても、まずその写真が買われることはないんですよ。それだけ先生方が盛りあがったにもかかわらず、です。で、なんで買わないのか親御さんに聞けば、その写真にはわが子の顔が映っていないからなんです。

このことが意味するものは、おそらく先生方が感じている、子どもを後ろ向きに見ながら、その子の熱心な姿を想像し、そこに育ち

を見つけてくることの楽しさや喜びとかを味わえるような、あるいは味わおうというような雰囲気というのがある、そういう風土が今、ものすごく私たちの社会から薄れてきているんだと思っただけです。

目の前で何か、曲芸まがいに見えること。たとえば「あいうえお」は、日本では小学校に行けばすべての子どもが一からそれを習い、みんな必ず書けるようになるわけですが、うちの子は三歳で読めた・書けたと「早くできた」ということに一喜一憂するわけです。でも、その「早さ」ってそんなに意味がある素敵なことなのだらうか、という問いはますますいふんですよ。

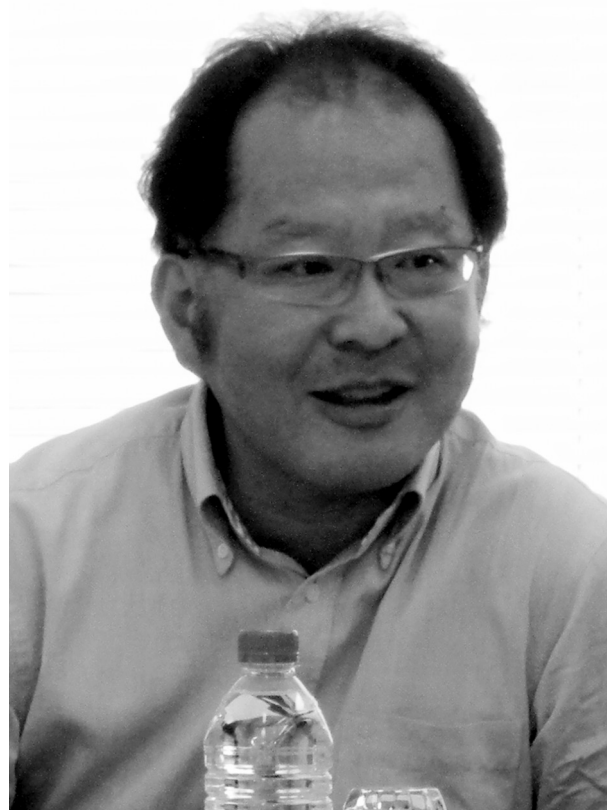
後ろ向きから眺めながら、「子どもってすごい」「おもしろい」「こんなふうで育っていくんだ」という驚きや喜びを味わうというよりも、正面に回って「どうなっているか」と、できをチェックし、評価しながら見ていく。そんなことに追いまわられている。

でもそれは、もしかすると、大人たちもそうなんだと思っただけです。常に前に回られて、あなたのノルマがどうなっている、とチェックされ、評価されている。私たちの社会は今、早く、たくさん量を間違いないこなせる人間を「優秀」と一般的に呼んでいます。なので、発想が豊かで、物事を丹念に納得いくまで繰り返したり、取り組んだりする人は「個性的」とか「こだわる人だ」とはいわれますが、「優秀」とはいわれな

いすよね。常に比較の中で真正面に回られ、管理的なまなざしの中で評価される。

そんな社会に親御さん自身も囲い込まれていく。そして、それをそっくり子どもたちに対しても行おうとする。「早くからできること」が幸せになることだ、たぶん。って。

ただ、皮肉だなと思ってしまうのは、親御さんたちは、決して悪意ではないんですよ。むしろその逆で、自分が今苦しんでいるからこそわが子を幸せにすることの一つの手段として、一生懸命取り組まれる。でも、それってノルマに追い詰められ、疲弊する大人自身を想像すればわかりそうなものだとも思うのだけど、むしろ子どもたちを追い詰めることにつながりかね



岡 健氏

ないだろうし、大人たち自身にとっても、いつまでも前に回って子どもを見ていないと安心できなような状況を生んでしまっている。そうした社会が、今の私たちの社会の中にはあるのかなって思っています。

菊地／では、そういった社会の現状の中で、具体的に私たちがどうあるべきなのか、またどうあってもらいたいのか、ちょっと踏み込んでお話しいただきたいと思います。

共同性、そして連携できる 仕組みをつくる

籠／毎年、九月中旬に十日間ぐらい、学生を連

れて沖縄の観光地でない集落の中に入って、地元の人たちの支援を受けながら、保育園を訪問したりするんです。そこに、今年、私のゼミを取っていて、昼間は先生の顔を見たくないって、ほとんど学校に出てこない子と一緒に

行ったんです。すると、後半になって彼女がぼろっと「先生、行こうかな」っていうんです。学校にまともに来ない子が、過疎化していて、求人をかけても保育者が来ないような沖縄の集落の保育園に行こうかなと。彼女は二年で卒業できないのはわかっていたんですが、「やるんだったら、本当に俺がはたらきかけるぞ」みたいな話をしたんです。

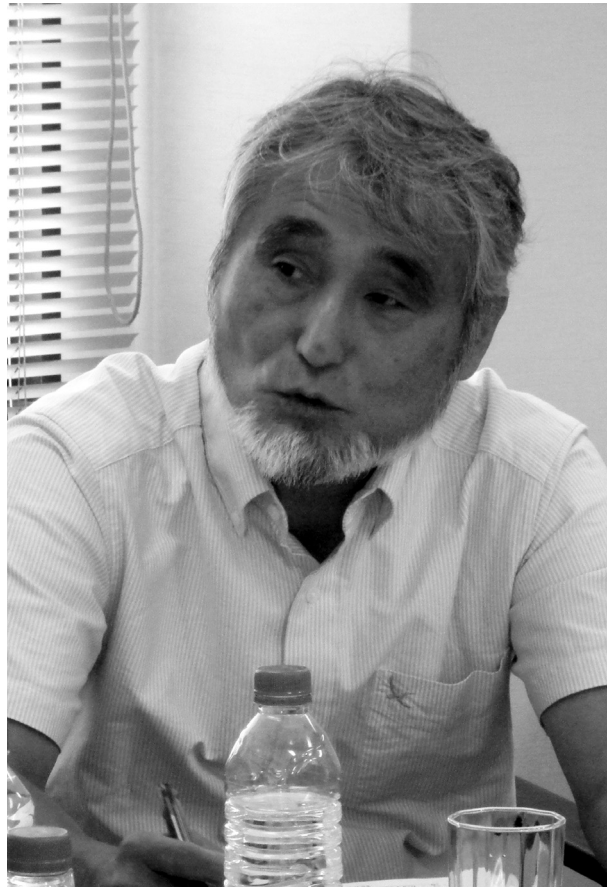
卒業生でも、沖縄に送って、そこで根付いている子たちが何人かいるんです。やっぱり千葉の保育に合わない、社会のテンポに合わない、自分の居場所がないということ。

都市部だと「木の上に登った、危ないから下りなさい」というのが、沖縄だと「あー、よく登った。もつと上がれる」っていうぐらい、逆なんです。そういうのにふつとなじめそうな引き出されるような、学校にまともに来ない子が、家から飛び出て田舎に行こうかなと思うことに、考えさせられるものがあります。

菊地／その子は、受け入れられたっていうのが一番大きかったですでしょうか？

籠／はい。言葉でない中で、受け入れてもらったって感じるんでしょうね。やっぱりそういう

常に真正面から評価する社会は、前に回って子どもを見ないと安心できない状況を生んでいる……●岡



熊 光夫 氏

話になったとき、ダーツと涙流しますね。

それから、話を戻しますと、共同性というよ
うなものが、私が見ているいろんな場面ではも
う期待できないし、見えない社会になってきて
いますね。

それをどうつくっていくかということが保育
園の課題だろうし、養成校の教員が学校の組織
として、学生、卒業生と絡みながら、どう一緒
にお互いが支え合える関係をつくれるかという
あたりが必要なんだろうと思いますね。もつと
お互いが支え合い、行き来しながら、また切磋
琢磨しながら、研修しながら、本当に人と人が
支え合いながら安心感を持つ共同性みたいなも
のをつくるしかない。

保育そのものというのは、一般論というのは

絶対にあり得ない、一つひとつの実践がみんな
違うと思ってるんですが、一つひとつ違う実
践が何かを軸にして連携できる仕組みを、お互
いがもう一歩踏み込んでつくりながら、学生も
育つ、子どもも育つという仕組みをつくらな
いといけない。

保育者の給料、労働条件など、確かに大変な
問題ですが、それを補充したから変わるかとい
うよりも、やはり大変だけれども連携したらこ
ういうものが生まれ、見えてきた、ということ
を見せることしかないだろう。それは、千葉の
現場の中でやらなくてはならないのかなという
ふうに、私の中ではあるんですね。

絶対に都会じゃなくて地方だ、地方からつく
るべきだし、つくりやすいだろうと思うんです。
保育現場で保育士を育てることで子どもの気持
ちを本当に考えられるかどうかが見えてくるの
で、養成校と現場とともに、保育士を育てる仕
組みをつくれれば、離職者も減ってくるのではな
いかと思います。

主任を育てて園長候補に

それから、これはずーっと不思議でならない
ことで、多分、ものすごい批判がくると思いま
すが、いいですね。私立の保育園で主任が育っ
ていない。主任を育てて園長にする育て方をし
ていない。これは、僕はものすごい問題だと思
います。今、これだけ保育園ができていますか
ら、やはり主任を育てて園長候補にして、外に
出して連携する仕組みをなんでやらないんだろ
うと、これはもう本当にずーっと思っています。

私のところの卒業生で、主任クラス、ある子
は園長になっている子がいて、最近また集まっ
てわいわいやっているんですが、この子たちに
任せたいなあと思いますもんね。だから、そう
いう育て方を中からしていく努力が足りないの
かなあという感じがしますね。全私保連として
も、そういう人たちを支えていく、または研修
をして管理者を養成するみたいな講座をやって
いく役割があると思います。

子どもと対等な中で本当に向き合い、気持ちを
やりとりしたとき、自分の課題が見えてくる

熊●……

日本の社会を再生していく 保育の中の可能性

それからもう一つ、最近、子どものエピソードを書きながら向き合っていく学生たちとやりとりしている中で感じることもあるんです。

一人の学生が一人の気になる子どもと向き合っていたとき、相手の子どもがなんでそうなんだろうと、相手のことを考えているんですね。相手のことを考えはじめたとき、自分が抜けるんです。相手のところに入っている。入ったときに、「なぜか」ということを自分に問いかけているんですね。そのときはじめて、子どもと

向き合う、対等な中で向き合う。本当に子どもと向き合って、気持ちをやりとりしたときに、自分の課題が見えてくるんですね。二十歳になって、相手の立場になって支えるという形をつくれるということ、学生から教えられました。

そして、もつと大事なものは、そこではじめて人間の尊厳とか、対等性みたいなものが培われるということなんです。これは、人間を大事にするとか、日本の民主主義をどう支えていくかということの原点みたいなもので、私たち養成校と現場が、もつとその辺をつくりあげていかなければならない。そういう中に、保育園が社会的機能をきちんと持つための芽があるのだからと、最近思っています。



平野弘和氏

先ほどは社会に対してすごく悲観的でした

が、原点をつくるものの中では、保育園も幼稚園も、保育の中での可能性というのは、日本の社会を再生していくものであると思っています。

菊地／第一回目のシンポジウムの中で、多様性を認め合うことが必要だという話があったんですが、笹先生のお話の中の、沖繩に行った自分が自分を認め、受け入れてもらったことにより、自分の可能性を新たに感じる事ができたということとつながっているのではないのでしょうか。

お互いを認め合い、そして支え合う共同体として、社会が形成されるべきにもかかわらず、その機能が今は失われている。だからこそ、私たち保育園は、地域、養成校、そして職員間や子どもとの共同性をつくりあげる役割があると、期待されているのではないのでしょうか。

保育園が主体として変わる

平野／我々には多様性を認め合うということが求められていて、それはお互いを尊重する、認め合うということだと思えます。でもそれは、余裕がないとできないことですよ。自分と向き合う相手とじっくりかかわる時間が無駄だっという価値観をどこかで変えていかないと、なかなかかむずかしいかなと思えますね。

保育園で実現するためには、やはり保育園全体の年間の流れを変えていかないとけない。

保育を変えるというのは、保育者と保護者も
共通理解を深め、準備期間と覚悟が必要だと思っ……………●平野

子ども時間に合わせたような、一日の流れ、月の流れ、一年の流れを構築していかないと、保育者に心の余裕は生まれなし、生まれない限り、子どもの気持ちを見取るといふ姿勢が生まれてこない。あるいは、園長、主任がそういう保育者をどう見ていくか、それを変えない限りは、なかなか実現できないと思う。だから、今やるべきなんです。

あまり細かく一日を区切ったり、見せるための行事を見直すことからはじめて全部含めて、乳児から幼児に向かう縦の流れと、乳児なら乳児の四月から三月までの横の流れとをもう一度分析して、それができるような、保育園全体の余裕を生み出すようなことを考えていかなければ、むずかしいと思います。

菊地／おっしゃることに共感しますが、実際に園が保育や行事のあり方、保育の一日の流れを見直すとなると、すごく勇気が必要だし、すごいエネルギーを必要とすると思うんですが。

平野／保育園内部の話だけではなくて、そこに信頼して預ける親の集団がいますから、親の集団に対して、どう説明責任を果たしていくか。しかも、明日から、来年から急にこうしますっていうのは、すごく抵抗があつて大混乱が生じるのは明白だと思います。だから、それは長期計画、中期計画、短期計画を立てながら、いずれそういう保育を实践する保育園に変わるんだという思いを持って、一年一年少しずつ変えてい

く努力は、やはり必要だろうと思う。急に変わるのは無理ですよ。

公立の民間委託で、急に来年から、あるいは二年後に民間に委託するなんてことになること、当然、保護者から反発が来ます。なぜ反発が来るかというところ、私はここが公立だから入れたんです。最初から社会福祉法人〇〇保育園だったら別の公立に入れたかもしれないのに、卒園する前に急に変わるといふことは、私としては断じて許せない。憲法違反だ」といふ話になるんです。

親の気持ち考えれば、選択は親にあるわけだから、それをいきなり変えるというのは乱暴なものではないでしょうか。少なくとも、その子が卒園するまでは変えられないと思います。次の年度から入ってくる子どもたちの保護者に対して、いずれ何年後かに民営化しますよと伝えておかないと無理だと思いますね。

それと同じで、保育を変えたいというのは、実はそのぐらいの準備期間と覚悟が必要だと思うんです。それに加えて、保育者も共通理解を深めていかなければならない。ただ、私たちの運動は、そこまでしろという運動ではない。皆さん方にきっかけをつくりたい。主体として変わるのはいずれの園なのですから。

菊地／それでは岡先生、私たちに望まれる子どもの育ちを支えることとはどういったことなのか、もう少し踏み込んだお話をお願いしたいと

思います。

保育の中の「喜び」 「豊かなこと」への気づき

岡／実習から帰ってきた学生に「保育園で子どもたちと生活してきて、何が楽しかった？」と聞くと、「いや、すごく緊張して行ったんだけど、子どもが、先生、遊ぼう遊ぼうって来てくれた」と。そこで、「よかったね。ほかには？」と聞くと、「お昼のときに、今日は私のお隣で食べて。私のお隣に来てよっていうふうに、すごい取り合いになって、ものすごい人気だったんですよ」。なので、もう一度「よかったね。ほかには？」と聞き返すんです。すると、「せっかく行くからピカチュウの折り紙を覚えていって子どもたちにも折ってあげたら、私にも折って折って」。てつて。

いよいよしようがないので、「よかったね。でもそれって、全部、私が楽しかったという話だよ。子どもと一緒に生活してて楽しかったことない？」って聞くと、いわれてきよんとしている子もいるし、ハツという顔になる子もいるんです。

ハツとなった子たちは暫く考えた後、「そういえば、野菜を全然食べなかった子が、ちょうど六歳の誕生日を迎えたので、じゃあ六歳になったからどうですかっていったら、野菜頑



菊地秀一氏（司会）

張って食べる！といった子がいて。それまで全然食べなかったのに、プチトマト、その後食べたんですよ。すごいって、思わず思っちゃいました」とか、「のほり棒がすごく盛んで、一人、二人、三人、四人でき……。でも、ある女の子が全然できなくて、下から一生懸命足を押さえてやるんだけど、自分の背の高さでは届かなくて、あとはもうとにかく頑張れ頑張れしかいなくて、でも全然登れなくて。でも、実習に行つた三週間目の最終日に上まで上がれたんです。下りてきたときに、やったねって、思わず手を取り合って喜んでしまいました」といった話がよくよく出てくるんです。

ところで、この前者と後者の「楽しかった」に

は大きな違いがあります。というのも、仮に第三者である私が、はじめてその場に立ち会ってそこにいても、きつと嬉しくないんです。はじめてその子がプチトマトを食べても、もともと食べられるものを食べていると思うので、驚かないんですよ。要するに、食べ物食べているだけのこと。のほり棒をはじめ登れた子を見ても、のほり棒が盛んなんですね、とはいうかもしれないけど、この子ははじめて登れたかどうかはわからないので、やっぱり感動しない。最初にお話したことと絡むと思うんですが、保育の中の「喜び」って、子どもを線で追っ掛けていくから見えてくる「喜び」だと思っんです。毎日子どもと一緒に暮らしているから、こ

の子、こんなふうにしたんだな、こんなふう

に頑張っているねって見続けているから、それができると、「よかったね」っていう言葉が出てくる、そういう営みだと思っんですね。

それともう一つ、継続的に子どもを見ることがなぜ大事なのか、の理由なんですけど、じつはそれをやると、「豊かだよね」ということに気づけるようなプロセスを園の中で持つことができ

るからだと思うんです。

たとえば、今の小学校以降の教育の大半は、残念ながら常に教師が子どもに定められた項目をあてがい、それをこなすことに比重がおかれています。でもそうすると、そのときの教師と子どもとのコミュニケーションは、「やってみな、やったね。じゃあ、次これやってみな、やったね。それじゃあ今度はこれやってみな……」と結局、次々と与えていくことが仕事になってしまっんです。でも、これって今や保育の中（たとえば、保育課程の編成が義務づけられました）にも少なからず現れているような気がしてならないです。○月にこんな遊びを、こんな活動を……というように。ただ、そうであればそれは、まさに小学校以降の教科経営案と何ら違いがなくなっっています。

保育の営みは「生活」

繰り返しになりますが、保育という営みは、原

則的に結果や成果といわれるものから逆算的に思考するものではないと思っっています。子どもが今、どんなふうにいるかということに応じながら、じゃあこんなことをやってみよう、と活動をつくらなければならないはずなんです。

もちろん、そうした活動は何の前提もなしに無作為に出てくるわけではありません。子どもたちはその園の中で暮らしているので、あんなふうなことをやってみたかったんだよねとか、季節の移ろいとともこの時期になると実がなつてみたいながあれば、それに基づく活動が生まれ、その実を触っていたときに、そういうえば、こんなことをお兄ちゃん、お姉ちゃんはやっていたなあということが再現されて：というように、曆みに当たるようなものがあるのだと思うんです。

だからこそ、保育は「生活」なんだと思っっています。そして、そうした流れになるんだと思っんですね。

子どもに「応じる」とは

では、子どもに「応じる」とはどういうことなのでしょう。もう少しわかりやすくいうと、人は、自分の心が動いたら誰かに何かを伝えたい。それは本来大人も子どももです。なので、たとえば子どもは、何かができた、見つけたら、「先生でできた、見て見て」って来ますよね。で

もそのときに、その子どもの様子(プロセス)を見ていない人ほど、本当は見てもいないのに、必ず「うわあ、上手、すごい」っていう場合が多いですよ。

でも、それって必ずしも悪意からじゃないんですよ。むしろ、子どもがなんか喜んでいいることは感じるから、それを何とか共感してあげたいと思っ、「すごい上手」っていつたりするんです。でも実際には多くの場合、そうやって共感されたりほめられたりすればすほど、「じゃあ先生、これあげる」って終わってしまう場合が決して少なくない。

そうすると、「ああ、そうなんだ」って、関心を寄せればいいですよ。「じゃあ、ここはこうなっているわけ」と先生が子どもにたずねれば、子どもは「そうそうそう、これはこうだね、ああだね」と教えてくれます。「じゃあ、ここはこうなんだ」と保育者が続ければ、「そうそう、そうだよ」と子どもは教えてくれたりするでしょうし、あるいは子どもの意図とは違うことをたずねれば、子どもは「違うよ、先生」と教えてくれます。

で、面白いのは、そういうことをやっているうちに、子どもたちって、すごく不思議なことに、「あ、ちよっと待ってて、先生。いいこと考えた」と、どこかに行つてまた新しいことを見つけて、「先生、見て見て、さっきの」となったります。これは、間違いなく活動が深まっ

ているわけですよ。

「関心を寄せられる権利」

じつは人は、いや子どもならなおさら、「関心を寄せられる権利」「監視される権利」ではなくがあると思っっています。

関心を寄せてくれるから、それに対して自分の関心はつきりしてきて、関心が次へと広がっていき、新しいことをやりたいって思うようになっていく。その場限りの点としてのかわり、いわば私がやりたいこと、私がさせたことをやったかどうかで評価するのではなく、子どもに継続的に関心を寄せる、「何が面白そうなの?」「こんなこと面白そうなの?」「じゃあ、こんなこといつちやったらどうする?」「じゃあ、どうなった、その後?」と線で見続けていくことになって、その子も育つことにつながるし、先生自体の喜びにもつながるのだと思うのです。

逆にいえば、変な例ですが、「保育者の話って長い」っていわれるじゃないですか。今までこんなだったのに、〇〇ちゃんが、こんな場面です。どうしたこうした：って。それに対して、一般的に世の中の人って、「すいません、結論からいっていただけますか。どうなったんですか?」って。でも、こうして考えるとすごくわかる気はしませんか。だって、保育者が伝えたい子どもの

育ちは、経過をしゃべらないと伝わらないことだからですよね。

「できたんですよ」って、わかりやすい。端的なんです。でもそれは、結果だけ見ればいいといっているんです。だけど、プロセスがあつて、これがあるからいいでしょうっていう話し方に、保育者はなるんです。それが、人が育つということだからだと思ふんです。このプロセスを共有してもらわないと、結果だけを求めることに一生懸命になつてしまふ。

菊地／過程を共有する、プロセスをきちんと把握しながら保育していくことが大切、という岡先生のお話は、平野先生のお話にもありました。が、私たち自身に余裕がないとできないことだと思ふんです。

篠先生は、家庭での余裕がなくなつてきた、それが今の学生の姿とおっしゃっていましたが、保育現場の中でも同じことがいえると思ひます。私たちは保育、家庭においても余裕を取り戻すことのできるのでしょうか。

自分たちでつくるものを提案していく

籠／今の状況の中では、とてもむずかしいですよ。私たちの養成教育でも教科が決められて、時間がみつちりて、日曜日も休日授業をやつて、がちがちにされていますよ。年間十五回、学

生に授業したから育つのか、覚えるのかつて、ありえないわけですが、それを我々が平気でやっている。

ですから、私たちとしては、学生がどう育っているか、こんな子がこう育っているんだというこの面白さを実感として持っているか、語れるかということと、岡さんが話したように、子どもの育ちを保育者どうしがちゃんと語れるための実践のありようみたいなものをつくつていく必要があると思ひます。

それと、建物から造り替えるなど、最近いろんな工夫がされていますが、保育というのは暮らしにより近いといわれながら、学校化なんです。とくに幼稚園、私のところの幼稚園なんて本当に典型的なんです。それを、たとえば大きな民家のような雰囲気の中で保育すると、そこに入つてきた人たちが、そこで共有する時間の楽しさ、豊かさを、どこかつくつていくことになるんだらうと思ひます。

そのことは、そのまま私たちの養成教育にもいえることなんです。私は、黒板があつて、教室があるという形は絶対にやめようと思つていふんです。畳があつたり、絨毯があつたりでいいと思ふ。

だから、そういうものを今、もう一度学校化に対して挑戦しながら、自分たちで暮らしを取り戻して、得るもの（それは、豊かさや知識とか）をつくつていくことどう挑戦していこう

かなあと思つています。それには、今のものに対して、はつきり「ノー」といって、自分たちでつくるものを提案していきたいと思つています。

菊地／まだまだお話は尽きないと思ひますが、予定の終了時間となりました。

今回は、「子どもの育ちを支える」ための具体的な保育実践から養成校の学生を通じて見る日本社会の現状まで、幅広いお話を伺いました。過去二回のシンポジウムでも、それぞれのお立場から貴重なお話を伺いましたが、皆さんに共通することは、日本が失いつつある「子どもの育ちを支える」力を再生するために、私たち認可保育園がその中核として期待されているということ。そのため日々の保育実践が、今、求められているということではないでしょうか。今日のお二人のお話で、そのことが確信できたと思ひます。

本日は、本当にありがとうございました。

四回にわたる連続シンポジウムは、いかがでしたでしょうか。

二〇一二年一月二十五日～二十七日に開催される第三七回保育総合研修会の第八分科会（二十六日開催）では、このシンポジウムを引き継いで、『育つを支える』保育園のミッションを明らかにする」をテーマに、私たちが取り組まなくてはならない課題、自ら変わる具体的な手立てなどを明らかに（可視化）していきたいと思つています。皆様のご参加をお待ちしています。